

創建は11世紀の初めと言われ、応仁の乱で焼けるなど荒廃の歴史も持つが、後に徳川五代將軍・綱吉の母である桂昌院の加職を受ける。重要文化財も多数所蔵する



テンプル・スイーツ

Temple sweets

シュライン・ティーブレイク

Shrine teabreak

取材・文／トライアウト 山田涼子 竹中 聡（本誌）
撮影／江藤太亮 瀧本加奈子 中島光行 畑中勝如

世の中、とかく勇み足が多すぎる。京都の秋は、これからが本番だ。今こそ、紅葉で名高い神社仏閣と、境内・門前・参道など、その界隈の、心落ち着く甘味の数々をご紹介します。単に「癒されに」などと、もはや手垢のついた言葉は必要ない。各所でどんな「気持ちになるか?」。それを心から、ゆるりと堪能していただきたい。



副住職は「山を歩いてしんどかった」でも、「名前は憶えてないけど、長い松があるお寺が山の中にあった」でも良いと言う。この地の自然が、人の記憶に残るなら



高名な五葉の松は「遊龍の松」の名で呼ばれ、創建以来の600年を生きに生きている。横に横に成長しており、現在40メートルを超え、国の天然記念物に指定されている

善峯寺

■京都市西京区大原野小塩町 1372
☎075・331・0020
拝観 ■ 8:00 ~ 17:00 / 無休
拝観料 ■ 400円 (春と秋の寺宝館文殊堂特別公開時期は500円)
<http://www.yoshiminedera.com/>

Temple

松を見て思うは感銘か、謙虚か 自分への、明日へのエールか

副住職は穏やかに言う。「今の方々は目も口も、耳も肥えてらっしゃるのでねえ……。確かに。幸か不幸か、何もかも、京都流行りも、飽食の時代だ。そして世間は世知辛い。」
その方も、時間的にも経済的にも余裕があり、余程京都に精通した方だったのだろう。京都の名刹を巡りつくしたが、感銘を受けたことができなくなった参拝者があつたという。とある日、市内の三ヶ寺、四ヶ寺を回るのではなく、半信半疑でこの善峯だけに来た。そこで目にしたのは樹齢六百年を数える五葉の松。創建以来、寺として人と共に育ってきた国の天然記念物であり、日本一の松とも評される。
「自慢話になるようで申しわけないのですが、大金を投じて大きいビルを建てるのとは意味が違いますので……。人木一体、人と共に長い長い年月をかけて育つたものですから」。自慢話なのか。ビルを見上げる壮大な風景も魅力的だろう。だが、その参拝者ですら、久しく感じたことのない感銘を受けた気持ちは理解できる。
市中を一望できるため、心が大きくなることもあるだろう。だがそれは立地の話であつて、それよりも、想像もつかない年月を活きた自然の前では、感銘の前に人は謙虚になるのではないか。この松に比べれば、あまりに若輩だが、自分も自然のひとつとして生を待たされている。自然とそう思えるのではないか。「少しでも松に届くよう、力いっぱい生きよう」と。

Sweets

甘味×漬け物の間柄で見守られ 祈願成就も家路を全うしてこそ

ご年配の方から注文が多いという「甘酒」420円。趣独特の甘さもまた、同店の漬け物が引き立ててくれる。「近年、若い人は甘酒を飲む機会も減ったように思いますね」。利用客に勧めることも多い

秋ならば、樽出しの紅白の千枚漬けが入った「千枚漬進物セット」3675円が祝いの席にもおすすめです。ほか、地山西山菊の佃煮「菊しぐれ」630円などが店先に並ぶ



店内には以前、御所に生えていた大きなけやきの木の根が。「なければもっと大勢座れるのにね(笑)でも木の持つ生命力を感じますよ」。その横にあるテーブルや座敷で味わう

秋から春先までの「おぜんざい」578円は忙しい昼時以外に注文可。漬け物は「手の届くところにあるものを」と同じ種類はなかなか出てこない。小豆の引き立つ甘さに思わずホッと息が漏れる



よしみね乃里
よしみねのさと



■京都市西京区大原野小塩町 703

☎075-331-5521

●9:00 ~ 17:00 (食事は 10:30 ~)

火休 (4・5・11・12 月は無休)

【平均予算】600円 <http://www.yoshiminenosato.com/>

善峯寺に行こうとすれば、行きも帰りも、参拝者の誰もが通る。今でこそ漬け物で知られるためスイーツとして紹介するには少々趣が違うのだが、元は先代ご隠居用に建てられた茶屋。善峯寺の住職と懇意だったこともあり、この地を薦められたという。「善峯さんあつてのウチらですから」とは二代目の談。その思いを漬け物と甘味の関係」と言ってしまうと乱暴だろうか。普通、山腹にあるような善峯寺などの参拝後は、茶屋の甘味で疲れた体を癒す。漬け物はそんなぜんざいや甘酒の横に寄り添うように、少しだけ出てくる。塩漬のあと、一押し、二押し、三押しまで手作業で作る漬け物は、汁漬けには真似のできないほど味が深い。ゆえに「甘味の引き立て役ですよ」と二代目。ならば善峯寺を甘味、同店を漬け物と見立てることもやぶさかではあるまい。たった今、店内に入ってきたお客にも「善峯さんに行ってきたはったん？」と聞き、「何なら先に詣でできなはれ」と参拝に向かわせた。「参拝後に一度ここで落ち着いて、それから無事に家まで帰っていただきたい」からだ。なるほど、門前茶屋本来の意義は、旅人の休息と旅の無事を祈るものではなかったか。確かに急勾配の参道、夜道も限りなく暗い。「帰り道こそ、気を引き締めよ」と茶屋はあくまで祈願成就の引き立て役。今日も静かに参拝者を見守っている。



弘法大師の高弟・智泉大徳が神護寺の別院として開いたという寺院。沿革や逸話にも事欠かず、「その日、その瞬間を一所懸命生きなさい」という教えにも興味は尽きないが、「宗教だけで解決できるものではありません」というご住職の言葉が、何よりも、実に真っ直ぐに心の中に浸透してくる

Temple

誰もがひとりの随筆家たらん しかして心境冥会の理が知れよう

世の中、とかく「癒し癒し」。時世と言ってしまえばそれまで。時に安易に、人は安らぎを得ようとする。三尾地区の一、この槇尾を訪れ、静謐な自然の中、紅葉をくぐるように指月橋を越え、西明寺に向かう。歩くことが至高の贅沢になる。

癒しなど必要ない生活。それを理想とするならば、理想をどこに求めるか？と自問する。仏道において、暴言に近い簡略さで言えば死後、つまり極楽浄土に求めるものと、現世に求めるものふたつ。弘法大師が説いた真言宗は後者であり、そのためこの西明寺も厳しい戒律で知られる。特に世間が乱れるにつれ、厳しい戒律が必要になるとも。「なるほど、今の時代に当てはまる話ではないか」と、ここで励んだ修験僧たちを偲び、明日からは戒めの気持ちを持とうと思うことも、確かにできる。

だがご住職は言う。「癒したり治したりということは、これはもうお医者様や専門家にお任せするしかありません(笑)。ただ心境冥会(しんきょうみやうえ)という言葉があります。心は環境によって変わる。また環境によって心も変わる。静寂の中で紅葉をご覧になることで、心持ちが変わることはあるかもしれません」と。

寺院の歴史や沿革を知って思うこともまた、人それぞれ。「随筆家が書かれるように、感じられるままにご紹介いただくのが良いのではないのでしょうか?」。誰よりも、事の本質をご存じなのはご住職であった。

西明寺
さいみやうじ

■京都市右京区梅ヶ畑槇尾町1
☎075-861-1770
拝観■9:00～17:00 / 無休
拝観料■400円



清滝川の上に架かるのは、西明寺参拝者の誰もが通る朱塗りの指月橋。上から眺めるなら西明寺の石段から、横から眺めるなら隣の指月亭から。紅葉とともに真っ赤な朱が、秋を感じさせてくれる

